

想定外を想定する

(少し前の話ですが) 今日、クラブ活動を決める日。4年生は初めてのクラブ活動です。何に入ろうか、緊張(5,6年の先輩もいますから)しながら、わくわくした気持ちがあふれています。

「やった～、裁縫やってみたかったんだ。やったことないから」

「動画クラブは何するかわからんけれど、やりたい」

好奇心に満ち、挑戦する心がみなぎっているそんな4年生の学年目標は「レベルアップ」。端的でそれでいて熱い。

そんな4年生を見ていた時、津田雄一さんという方を思い出しました。

小惑星「リュウグウ」調査プロジェクトが記憶に新しい、小惑星探査機「はやぶさ2」の大活躍。そのプロジェクトマネージャーが、津田雄一さんという人です。このプロジェクトの難しさは、なんとといっても小惑星「リュウグウ」に行ったことがある人は一人もいないこと。つまり、まったくわからない「リュウグウ」へ着陸したり、その構成物を採取したりというプロジェクトを成功させねばならないことです。

言い換えると、事前の計画できないことを想定しなければいけないということです。

津田さんは、その難しさを「想定外を想定する」と表現され、次のように話します。

「私たちはリュウグウを知らないのです。時間を費やして計画書を作成するよりも、行って見て、いかに迅速に正しく理解し、認知し、それを基に正しい判断、面白い発想ができるかが大切なのです。ですから、型にはまった組織ではなくて、600人の思考がフル回転し、思いついたこと、よい発想がチーム全体に伝播しやすいような環境を作ることが私の役目となります」

大変興味深いお話です。

実はこのインタビュー、全部で4ページを超える記事なのですが、だから失敗が必要だったと続きます。やってみて失敗を重ねるからこそ、「これはダメだった。だからこうしよう」という想定外の想定が生まれてくる、と。

なるほど、納得。

更に、それらの失敗を笑いあえるような環境もまた大切、と津田さんは述べられています。成功だけを積み重ねるチームにはなしえない「想定外を想定する」ためには、失敗をたくさん共有できるような環境こそ、非常に重要であるということです。

さらに、納得。

その造詣の深さにも驚かされますが、そのマインドセットにも深く学ばされます。失敗を学びに変えるには、一人ひとりの心持ちだけではなく、そのような失敗を学びに変える環境こそが大切だと。

翻って4年生の目標を眺めてみると、あるじゃないですか。「とりあえずやってみよう」って。素敵。失敗を学びに変える環境こそが、4年生の目指すチームの姿なのですね。

